

仏即ちいく万億の仏さまのカンゲキ・サンタン・ハゲマシ・授記・供養等と精一ばいの激励が之にこめられている。私題の口語訳というのは、むつかしい問題をほど解いて易しく説くこと、由比浜師弟お別れの浪揺り節のよ

執金剛について

望 月 海 淑

執金剛について観世音菩薩普門品は、以下以執金剛身一得度者即現執金剛身而為説法(一)と示すだけで、執金剛身の何たるかを説明してはいない。正法華経も金剛神(2)と示すだけで、梵文は vajrapāṇi vaineyaṇān satvānām vajrapāṇi rūpeṇa dharmān deśayati (3)と語り、執金剛は vajrapāṇi の訳であることが解るだけにすぎない。そこで法華経以外の經典に依ると増一阿含経卷22の須陀品の須摩提女の物語の中に、仏が悪竜王に会うと竜王は密迹力士等を見て帰命した(4)とあり、密迹金剛力士在如來後手執金剛杵。…如虛空

中。在如來上。(大正2 P. 832下)長阿含経卷12の阿摩昼経には、仏の三度の質問に摩納が答えないので、密迹力士手執金杵在吾左右。当即破汝頭為七分。時密迹力士手執金杵。当三摩納頭上虚空中立。ので摩納は驚いて語った(5)とある。密迹力士は vajrapāṇi の訳で、金剛力士と同一であるが、大宝積経卷八の密迹金剛力士会に於て是金剛力士。名曰密迹。住世尊右手執金剛。(6)とあるので異論はなからう。即ち執金剛は仏の傍にひかえ、仏を害し、仏の意を承けようとなしないうものをして、心素直に教えを承けさせようとする務めをもっている力士と考えられるが、この点に關して、法意太子曰。吾自要誓諸人成得仏一時。当作金剛力士。常親近仏在外威儀。省諸如來一切秘要。常委託依。昔聞一切諸仏秘要密迹之事。信樂受意不懷疑結。(7)と説明している。即ち執金剛の暴威も仏の教えを信ずる素直な心をおこさせるためのものであった。(8)

法華経には若仏滅後於惡世中能説此経是則為難(9)といい数々見擯出(10)等々と示されるが、これは法華経の弘通者がどのような立場におかれるかを示すもので、それが難事であればこそ後分法華経(11)に

示される弘通者への守護と賞讃とが重大な意味合いを持つに至ることは言をまたないであろう。

一方、仏教美術の面から見ると、インド出土の彫刻の中には二・三の執金剛像が見出せない(12)のに、ガンダーラ出土からは非常に沢山な執金剛像を見ることが出来る。釈尊の教化はマカダ、コーサラ等の国を中心にしたものであったが、ガンダーラはカニシカ王(13)の築城に負う後発の地であった。気候温暖といわれたこの地も、カニシカの古都・砂漠の中のバルフに較べての上のことで、仏教の故郷から見れば、かなり厳しい地であつたろうと思われる。この気候風土の条件が仏の寛容の精神の上に、拒否といい、迫害をのり超える厳しさを求め執金剛造像になつたのではないか、という仮説を可能にしはしないだろうか。そして第二はギリシャ・ペルシヤ文化の影響であろう。(14)

BC 327アレキサンダー大王のパキスタン侵入でガンダーラ美術は始まる(15)といわれるがBC 2世紀から200年間この地はバクトリア・ギリシヤ人の版図となり(16)AD 40クシャーナのカーピセース一世はガンダーラに入り、その三世カニシカ王の時に仏教芸術の花が咲き誇つたという。従つてこの地の仏教芸術はインドのマ

ツーラのそれとは質を異にして、髭を持ち通肩の衣服の仏陀像など西方の影響をうけたものであつた。インゴルト(17)はガンダーラ芸術の制作過程を四期に分けているが、その一期に属するとせられるものには、釈尊と同じ大きさの執金剛が彫られているが、時代を下るにつれてこの像は小さくなり釈尊の影にかくれるようになる。これは最初は対等な立場であつた仏教と交流した西側の思考がやがて仏教を盛り立てるものになつていたことを暗示するように思われる。西側の思考といつたが、アフガニスタンのハッダにある執金剛はまさしくギリシヤ人の顔である。何故か。執金剛が持つ金剛杵はダイヤモンド或は雷の意である。雷はインドラ神(帝釈天)のことである。Varipaniは帝釈天を意味することもある(18)が帝釈天ならばギリシヤ的風貌にはならない。そこでギリシヤにそれを求めると、ギリシヤ神話の英雄ヘラクレスは髭をはやし手にサンダーボルト(雷)を持って描かれハッダの執金剛と酷似している。その上カーブル博物館には左手に金剛杵、右手にサンダーボルトを持ったギリシヤ風貌の執金剛像が見られるので、ガンダーラ芸術での執金剛はヘラクレスを持って表現されたのではないかと思わせる節が濃厚であるといえよう。

釈尊を守り、教えに害をなす者を摧滅させ、飄意させ弘通者に確な拠り所を与えるためには、強力無双の人物を必要としたのであろうが、東西文明の合流の地ガンダーラは執金剛の造像においてそれを具体化しようとしたものだと思われる。そしてそれが観世音菩薩普門品等の經典の中にも入れられ、中国・日本と一般化したものと思われる。

(この一文作製に関して天台宗の葉上照澄長病に多大な御指示を得ました。御礼申し上げます。)

註 (1) (2) (3) 大正九・57中、129下、Kein 444
(4) 大正二・663下 (5) 大正一・83上 (6) (7)
大正十一・43中 (8) 大正十二・620中、大正十六・
560中 (9) 大正九・34上、104下、Kein 253
(10) 同上36下、107上、274 (11) 本田義英・法
華經論、布施浩岳・法華經成立史 (12) マツウラ出土(ニ
ュデリー博)の仏座像に執金剛が見られ、類似した像がカル
カッタ博にもあるが、執金剛かどうかは定かではない。もう
一点、ポストン美術館にあるという。(13) 王の即位年代は
AD 78、144、278 説等ある。(14) 高田修・仏像の
起源外 (15) 西川幸治・曾野寿彦・死者の丘涅槃の塔外
(16) この頃のメナンドロス王はミリンダ王と仏教徒によは
れ、弥蘭陀王問経が知られている。(17) Gandharan art
in Pakistan (18) 南伝大蔵経六一小統王史 P 505 等

日蓮聖人の仏身観

北 川 前 肇

日蓮聖人の教学は、本門寿量品を中心に構築され、こ
とに真の一念三千の成立を、「然善男子我実成仏已来」
の発迹顕本の文に見出されたことは周知のところであ
る。このように、聖人が本門法華―寿量品の一品二半を
教義・信仰の根底に位置づけられたことは、釈尊の久遠
実成の開頭が、如何に重要な意味を持つものか、改めて
確認されるのである。すなわち、寿量品の発迹顕本を契
機として、超越的には釈尊の久遠性・絶対性、および
その救済性が明らかにされたのであり、また衆生との必
然的連関性も開頭されたと領受できる。この発迹顕本の
問題は、宗学上の課題として、本尊論、顕本論、救済論
と深くかかわりをもち、衆生の立場からは、凡夫の成仏
論であると同時に、法華経信仰者としての信行のあり方
とかかわっているのではないかと考える。そこで、いま
一つの試みとして、発迹顕本された久遠実成の釈尊―寿
量品の仏を、日蓮聖人はどのように信解されたのか、と